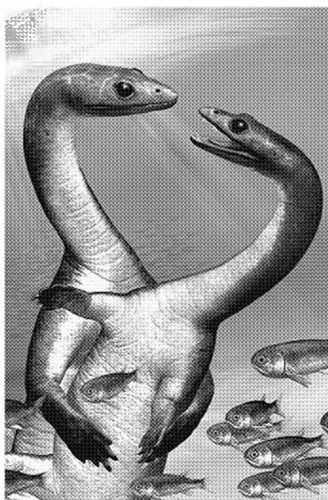


# 太古に生息 ケイチョウサウルス

## 1歳でも繁殖可能

約2億4千万年前の三疊紀の海に生息していた「ケイチョウサウルス」という小型の爬虫類（はちゆう）類が、生後1〜2年で性別による体の形の生



ケイチョウサウルスの雄と雌の想像図  
イラストレーター・Takumiさん提供

## 東京都市大など「思春期」を特定

定できた極めて珍しいケイチョウサウルス化石という。はつきりしない子ども計18体の腕の骨の化石を分析した。

ケイチョウサウルスは体長30センチほどで、中国南部で多くの化石が見つかっている。早いうちに繁殖を始め、短期間で多くの子孫を残せていた可能性がある。

東京都市大の中島保寿准教授は「弱そうに見える小さな爬虫類がどうやって繁栄していたのかが明らかになった。生き残り戦略の多様性に気づけた研究だ」と話す。

チームは、中国の博物館や大学に保存されているケイチョウサウルスの成熟した雄と雌、性別が

骨の断面には成長に沿って年輪が刻まれており、雌は子どもと同様に円形の年輪が刻まれていたのに対し、雄は生後1〜2年目に円形から雄の特徴である三角形に変化していた。

骨の形が変わること、筋肉の付き方も変わり、雌に抱きついたり、餌を取ったりするのに有利になった可能性がある。ケイチョウサウルスは雄雌含めて大量の化石が残っているため、細かい分析ができたという。